

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.65

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

<巻頭エッセイ>

岡倉『英語教育』より百年

一年頭のご挨拶—

竹中龍範

皆さま、明けましておめでとうございます。本年も支部活動の活性化に向けていっそうのご支援をお願い申し上げます。

明治44年10月23日、西暦で言うと1911年、今からちょうど100年前の秋たけなわの時季ということになりますが、岡倉由三郎の『英語教育』が刊行されました。岡倉の「外国語、特に英語の教授と学習とに関する卑見を公にすべく」、その前年秋より口述筆記が始まり、その原稿がおよその形にまとまったのが同年1月末、その後の諸々の経緯を経てようやくその秋に公刊されたのがわが国英語教育界のバイブルとされるこの名著ですが、本年はその刊行より百周年ということになります。

本書は、今もなお、随想子にとってはO. Jespersen, *How to Teach a Foreign Language* とともに、何年か一度は読み返すバイブル、古典となっておりますが、これについては個人的な思い入れがありますので、それをご披露することをお許しいただきたいと思っております。

すでに三十有余年前のこととなりますが、大学院に入ってから松村先生にお誘い頂いて英学史・英語教育史研究の分野に足を踏み入れて間もない頃、先生と喫茶店でお話をしている際に、岡倉の『英語教育』は、広大本部図書館に昭和版が蔵されているものの、明治版がないので、これを探してみますと申し上げたことがありました。それに対して先生からは「私が英語教育史の研究を始めて十数年、現物はおろか、目録でも見たことのないものだから簡単に見つかるとは思えないし、岡倉を知らない古本屋なんてのは潜りだから、およそ見つかったとしてもそう安く手に入るものではないだろうね」とのお答えでした。

それがなんと、それから数ヶ月後、福岡で開催された第3回全国英語教育学会の前日、ひとり早めに博多駅に向かい、道に迷いながら入った九大前の古書店でこの岡倉『英語教育』明治版に巡り合いました。しかも、その店が国語・国文学を専門とする店であったおかげか、500円という値段で、棚の脇に平積みされていた山の中から見つけることができました。同書の平には篆書でもって書名が書かれておりますが、学部時代から篆刻に親しんでいたことが役に立ったような次第です。その上、その扉に記された「英語教育」の題字は明らかに郷里彦根藩ゆかりの日下部鳴鶴の揮毫によるもので、縁(えに)を感じました。

本書を何度か通読し、その度に感じるのが、本書に記された内容と現在の英語教育とを照らし合わせた時に今の英語教育がどれくらい進んでいるのだろうかということです。兵庫教育大に教えられた青木昭六先生から「今の院生はイエスペルセンも読まずに英語教育を論じようとしているが、それでよいのか」と伺ったこととあわせ、帰るべき古典を持っていることの幸せを思いつつ、岡倉『英語教育』百年の本年に思いを致しているところです。

(香川大学／日本英学史学会中国・四国支部支部長)

平成22年度第2回(通算63回)研究例会 報告



2010年12月11日(土)、香川大学教育学部(香川県高松市)において、平成22年度第2回(通算第63回)研究例会が開催されました(参加者17名)。開催にあたり、支部長の竹中龍範先生、副支部長の田村道美先生には格別のご配慮を賜りました。厚くお礼申し上げます。

高松研究例会プログラム

日時：平成22年12月11日(土) 午後1時30分 受付開始

会場：香川大学教育学部(〒760-8522 香川県高松市幸町1-1 TEL:087-832-1523(竹中研究室))
第3会議室(教育学部2号館2階)

開会行事(14:00~14:10) 支部長挨拶 竹中龍範(香川大学)

研究発表①(14:10~15:20)

竹林文庫の英文原稿に関して

保坂芳男(立命館大学)

司会：上杉進(元高水高等学校)

研究発表②(15:30~16:40)

「カッセル国民文庫」の書誌的研究

田村道美(香川大学)

司会：馬本勉(県立広島大学)

閉会行事(16:40~17:00) 副支部長挨拶 松岡博信(安田女子大学)
写真撮影

懇親忘年会(18:00~20:00)(高松市、海鮮問屋仲見世にて)

研究発表①

竹林文庫の英文原稿に関して

保坂 芳男 (立命館大学)

今回は、竹林文庫(同志社大学)の英文原稿に関する発表の第3回目であった。竹林文庫には、初代の帝国図書館館長の田中稲城関連の書籍、英文原稿、手紙が含まれる。1回目は、W. Deningの*English Readers*(明治20年発行文部省編纂教科書)の原稿を発見したことを報告した。2回目では、東京大学で用いられた独逸語学読本(明治17年編集)の英文原稿があることを報告した。今回は、『江戸繁昌記』(寺門静軒著、1831年以降随時発行)と『東京新繁昌記』(服部誠一著、1874年発行)の英訳の原稿が見つかったことを報告した。その意図するところは、W. E. Griffisとの手紙からすると田中は友人と一緒にアメリカ人対象の「日本物語」を作成しようとしていたらしい。その他、手紙から窺えるGriffisと田中の交流を紹介した。

【参加者の感想】

◆興味ある資料に基づくご発表でしたが、推測によるところが少なくなく、史的研究に求められる実証性という点から、更に必要な資料によって論を支えて下さい。筆跡については、同じ人が同一の文字について数種類の字体を使うことはよくあり、筆跡鑑定の際には、もっと細かなクセの分析まで行うのが普通です。ご質問にもあった大塚高信の『シェークスピア筆跡の研究』なども参考にされるとよいでしょう。また、ネイティブに見てもらったところ、ネイティブであれば間違ふことのない分綴の誤りがみられるという指摘を受けたとのことでしたが、ほかにも、consonant cluster部分に母音字が挿入されて、明らかに日本人による誤りと判断される綴りの誤りも見られます。<Dragon>

◆保坂先生のお話は謎解きのような面白さのある研究で大変興味を持って拝聴いたしました。原稿Bの執筆者が誰であるか、また、その英語は日本人によるものか、Native English Speakerによるものか、特定されることを祈念いたします。<マッピー>

◆独創的な切り口でのご発表であったと思います。ご発表を拝聴しながら、字体(筆跡)で作者を限定できるのか。グリフィスと田中の関係。田中は本当にアメリカ人向けに日本物語を作成しようとしたのか... ささまざまな謎が頭の中を駆けめぐっていきました。これらの謎が早く解明されることを願っています。<Rainbow>



保坂芳男氏

◆本発表は、社会・文化的意味の研究の起源ともいえる大変用意周到な研究で感心いたしました。教科書研究は、発音、語彙、構造、意味理解だけではなく、日本の政治、経済、文化、社会、科学などの分野の紹介を、海外への発信のみならず、日本の学習者へも英語で発信を果たすべき必要性和重要性を教えてくださいました。有難うございました。

<五十嵐二郎>

◆田中稲城が日本文化の発信に尽力したことはよく理解できたのですが、研究手法(筆跡鑑定?)にやや不安を感じました。もう少し証拠固めをした後、的を絞った話題提供をしていただくと聞きごたえのあるプレゼンになるのではと思いました。

<もみじまんじゅう>

◆分野としては、題材論を中心として、非常に興味深い討論が行われたと思います。保坂先生のご発表では、題材の特定作業の過程がつまびらかに語られ、まるで上質な推理小説を読むようで、興味尽きぬものがありました。

フロアからの議論も高度なものばかりで圧倒されました。特に史的研究における現代的意義は如何という問いかけは、このご発表に学問的に花を添えた感がありました。題材に日本の史実、民話等を用いることの意味を現在問うことは重要なことだと思います。英語教育について、文科省は十年一日の如く、四技能、四技能と叫びますが、このような教育思想が、賞味期限切れになりつつあるのは明らかで、例えば米国ではすでにthinkingを加えた五技能という考え方が実践されて久しいと聞いております。語学教育というものは、異なる文化のストーリー性同士のぶつかりあいなのであり、そのぶつかりあいの中に五番目の技能thinking等が入りこんでくる場があるのではないかと、そのような思いを喚起させてくれたご討論であったと思いました。<M'Cola>

◆竹林文庫の英文を詳細に検討されているのに感心した。関係者の資料を刻銘に追っていつて解明しようとする方法が勉強になった。更に研究されて原稿Bの筆者を解明されることを期待しています。

英語教科書に興味をもつものとして、Denningの英語教科書 *English Readers* が不人気だったとのことですが、その理由も解明してほしいと思います。一つには内容が日本のことを取り上げているのではないかということですが、これについては、イギリス中心、アメリカ中心、世界各地を取り上げる、等これまでの教科書が様々な方針で作成されてきました。以前日本と韓国の英語教科書の比較を試みましたが、韓国のは韓国の文化を中心に扱っていたのが印象的でした。(参考：山田昌宏「日韓英語教科書の比較」平成8年山陽放送学術文化財団研究助成リポート第40号) <ハムケン>

◆「Denningの英語教科書に日本人が関与していたのでは？」という疑問からスタートしたご研究に、英学史のロマンを感じずにはいられません。ご紹介された『江戸繁昌記』の英文翻訳を拝読するにつけ、現代の英語教育において、日本事情をあれだけ発信していけるだけの英語力を生徒に身につけさせているか(させようとしているか)考えさせられました。

<堂鼻康晴>

◆田中稻城とその周辺の英語教材編纂へのかかわりについて、継続して追求を続けられる保坂先生のご研究姿勢に感銘を受けました。岩国英国語学所の果たした役割の大きさを感じます。<Horse>



田村道美氏

【参加者の感想】

◆同叢書の現物を集められ、また、所蔵機関からの情報を得られてのご発表で、第1期第1冊 *Warren Hastings* の初版印刷年月の確定など面白く伺いました。ただ、この叢書が本邦英学史上、いかなる位置づけを受けるものかについてなお一層の調査を進めていただき、英学史研究の方に引き寄せたご研究の成果を機を改めてご発表いただければと思います。<Dragon>

◆田村先生のお話を聞いて、廉価なカッセル国民文庫がイギリスのみならず、アメリカや日本においても国民に文学に親しむ機会を与えることに大いに寄与したことは疑いもないことだと実感いたしました。また原著のコレクションにも驚きました。現在「青空文庫」という無料の電子書籍がインターネット上に公開されており、有名な著作に若い人が触れる機会が十分に与えられていることを思うと、新しいメディアによってもっと本を読む人が増えることを望みます。

<マッピー>

◆本発表を通して「カッセル国民文庫」について詳細に知ることができました。特に19世紀後半のイギリスの出版事情などもよく理解できました。「書誌的研究」というよりも「書誌学的研究」ともいべき素晴らしい内容の発表でした。研究(1)とありますが、研究(2)(3)と継続研究発表をされますよう期待いたしております。有難うございました。<五十嵐二郎>

◆カッセル社からの出版物に学校用図書シリーズがあることは知っていましたが、これほどの規模の文学作品の叢書が出版されていることは知りませんでした。夏目漱石や正岡子規がこの叢書を愛読していたことも初めて知りました。廉価版での出版を通して国民の教養の向上に貢献した素晴らしい文庫だったので、
<もみじまんじゅう>

研究発表②

「カッセル国民文庫」の書誌的研究

田村道美 (香川大学)

カッセル国民文庫第1期(1886-90年)の209作品の装丁・発行年・作品番号等についての書誌的調査結果を報告した。装丁に関しては、通常の紙装・クロス装以外に背革装の豪華本も刊行されたこと、1890年刊行の重版では緑と青の無地装となり、この青色無地装が第2期の装丁となったことを指摘した。作品番号に関しては、番号が背表紙下部に付くのは#3から、既刊書目に番号が付くのは#15から、既刊書目と次回作品予告が扉の手前頁に掲載されるのは#16からであると指摘した。#208: *All's Well That Ends Well* が実質的に最後の作品にも関わらず、#209: *Romeus and Juliet* が刊行された理由と、収録された4点のヴィクトリア朝作家の作品中、3点がDickensの作品である理由も明らかにした。

◆文学に疎い私にとっては難しい内容であったが、柳田泉や夏目漱石の記述から明治期から大正初期の日本人の教養の形成に大きく寄与したことが分かった。それと同時に今の大学生の英語教育の内容が実用に大きく傾倒しその質の希薄さに不安を覚えた。

書誌的な観点では、小説はピンクにするなど分野別に色が区別されていたこと、Dickens の作品が多くあること、第一期の最後がシェークスピアの「終わりよければすべて良し」という洒落が印象に残っている。専門とは違う高尚な発表が聞けるのも学会の醍醐味である。大変勉強になりました。ありがとうございました。〈保坂芳男〉

◆現在の電子書籍の登場と考え合わせると、文庫版の走りとも言うべき「カッセル国民文庫」のお話は興味のつきないものがありました。貧しい人々に対する教育という観点から、こういうものが出来たというのは、イギリス文化を考える上で非常に興味深いことだと思います。私はかつて、ロンドンの地下鉄の中で、ハードカバーのかっしりした本を読んでいる人々をよく見かけ、イギリスの読者層の厚さを実感したことがありました。ヴィクトリア朝の帝国主義的側面と裏腹に存在した、もう一つのヴィクトリア朝の素顔である進歩主義的な側面、人道主義的な側面を見るような気がします。(特にディケンズが3つ入っていたというようなところに、そのような要素がにじみ出ているような気がしました。) 〈M'Cola〉

◆カッセル文庫については初めて聞く名前なので、ご研究の内容はよくわかりませんが、10年以上もこの文庫を調査され収集されているお姿にひたすら感動しました。私が一番、関心を持ったのは John Cassell 自身です。年表から彼の生涯を察するとき、「カッセル文庫」は彼の人生哲学そのものではなかったらうか、と思います。また、John Cassell について教えていただければと思います。

〈Rainbow〉

◆大英図書館ほか国内外の図書館を綿密に調査されたり、インターネットも駆使して収集されたりするなど、田村先生の地道なコレクションに基づくご研究に圧倒されました。カッセル国民文庫が「毎週」刊行されたという事実には驚きました。極小の文字に溢れる本書を英国国民は一週間で一冊コンスタントに読み続けたのか?? また、大正時代カッセル国民文庫を読んでいたと言われる日本人学生や文学者に思いを馳せずにはられません。もう一度ゆっくり拝読させていただければ幸いです。

〈堂鼻康晴〉

◆まず第一に収集されているカッセル文庫とその収集の熱意に圧倒されました。私はカッセル文庫の存在は知りませんでしたので、明治、大正の英語学徒がこれらの文庫を手に入れたことに英語の勉強に励んだということを知り、日本の英語学習にこの文庫が貢献したことを知りました。この小さい紙面の英文と格闘した世代に比べて、専門家の注のついた研究社の「英米文学叢書」で勉強できた自分は恵まれていたと改めて思いました。書誌的研究という研究方法に疎い私にとっては大変参考になりました。英語の教科書の研究にも応用できるのかなと感じています。

〈ハムクン〉

◆「古書コレクター魂」を刺激されました。明治日本の英学熱の高まりと、文庫の第一期刊行年代の符合に大変興味を覚えます。〈Horse〉

【例会全体に関する参加者のコメント】

◆まず、懇親会がなんともうさい会場になってしまい、申し訳なく思いおります。人数の調整ができやすい店と考えたのが裏目に出て、忘年会シーズンでもあることから、他人の迷惑に思い至らない若者、or rather ばか者のグループと隣りあわせとなってしまうました。お恕ください。〈Dragon〉

◆両御発表とも、ご研究の深さに圧倒されました。それぞれの実証性の手応えには、感に堪えるものがあつたと思います。〈M'Cola〉

◆立派な会場をご提供くださいました香川大学の竹中先生、田村先生に厚くお礼申し上げます。

〈マッピー〉

◆職人芸、名人芸の域に達した事務局のマネジメントのおかげでとてもさわやかな例会でした。ありがとうございました。〈もみじまんじゅう〉

◆恵まれた会場で、全国大会の時間に比べてたっぷり発表を聞かせていただきありがとうございました。それぞれの発表者の真摯な研究態度に感銘し、また刺激を受けました。今後の自分の研究に少しでも役立てればと思います。また、懇親会は十分すぎるほどのお酒と料理に舌鼓を打ちながら、非常にリラックスした雰囲気熱心な先生方とお話しでき、大変いい刺激になりました。お世話いただいた事務局の先生、香川大学の関係者の皆様、本当にありがとうございました。〈ハムクン〉

◆昨年と異なりゆったりした運営で良かったです。発表は多くても3本でいいのではないのでしょうか。応募が多い時に選別が難しいとは思いますが。

その他、例年通り事務局の素晴らしい対応で滞りなく終わったことに感謝したいと思います。ありがとうございました。〈保坂芳男〉

中国・四国支部ニュース

>> 平成 22 年度第 2 回理事会

2010年12月11日(土)、高松例会に先立ち、理事会を開催し、今年度の活動報告および平成23年度活動計画、ならびに役員改選について協議しました(出席者7名)。

当日の協議、およびその後の調整の結果、来年度の支部総会ならびに第1回研究例会は、2011年5月28日(土)に広島地区において開催し(会場は未定)、第2回は12月10日(土)、岡山県津山市での開催を予定しています。

>> 『英學史論叢』第14号原稿募集

ニューズレターNo.64でお知らせしました通り、中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第14号(2011年5月発行予定)の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

- ・ご投稿に際しては、ニューズレターNo.64、および『英學史論叢』13号に掲載の「執筆要領」「標準書式」に従ってください。
- ・編集事務の都合上、研究論考をご投稿予定の方は1月31日までに事務局へご一報ください、メール(umamoto@pu-hiroshima.ac.jp)、またはFAX(0824-74-1725)にてお知らせください。
- ・原稿提出の締切は、**2011年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。
- ・研究論考・研究ノートの投稿は正副計3部、英学史随想・時評・書評の原稿は1部お送りください。

英学史学会全国ニュース

>> 日本英学史学会『英学史研究』43号

2010年10月1日発行。掲載論考は次の通り。
 [論文] 長谷川勝政「本田増次郎と清国留学生教育：『グアン・メソッド』と『筆談』による日本語教育」
 [資料調査・研究報告] 宮田和子「Chinese Recorder にみる C.A. Stanley の記録：『英華萃林韻府』(1892) 第3部の執筆者をめぐって」

>> 「日本英学史学会報」No.123

- 2011年1月1日発行。内容は次の通りです。
- ・新年のご挨拶・退任のご挨拶(庭野吉弘)
 - ・私の英学「天路歷程」(滑川昭彦)

- ・聴いて楽しいDVD「永遠のふるさと」(山下英一)
- ・第47回大会を顧みて ほか

◆支部活動報告として、中国・四国支部平成22年度第2回(通算63回)研究例会のプログラムなどが掲載されています。

◆お詫びと訂正 ニューズレターNo.64に掲載した全国大会における松村幹男先生のご発表タイトルに誤りがありました。正しくは、「文部省主催中等教員英語講習会」でした。お詫びして訂正いたします。

※日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です。詳細は以下の日本英学史学会ウェブサイトをご覧になるか、支部事務局までお問い合わせください。(以下は日本英学史学会ウェブサイト)

<http://www.tokyo-kasei.ac.jp/~shinoda/eigakushi/>

英学史情報ひろば

◇秋の叙勲で五十嵐二郎先生が受章されました

本支部顧問の五十嵐二郎先生は、平成22年秋の叙勲において、瑞宝中綬章を受章なさいました。心よりお祝い申し上げます。

広島英学史の周辺(31) 記録的な暑さの夏に続き、記録的な寒さがやってきました。四季の移り変わりが日本の良さだと言いますが、ちょっとメリハリが利き過ぎているような気がします。▼東京在住の方から、国立公文書館には広島英学の資料がいろいろあることを教えていただきました。早速、デジタルアーカイブにアクセスし、キーワードを入力してみます。広島英学校、高等師範、福山中学など、明治期の学校で教えた外国人教師の名を記す公文書がいくつもリストアップされてきました。一部はインターネット上で画像が表示されますが、公文書館へ出向けば、閲覧や複写もできるようです。▼まだ見ぬ英学史資料との出会いを楽しみに、日々、研究を続けていきたいと思えます。皆様、本年もどうぞよろしく願いいたします。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No. 65

2011年1月25日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話 & FAX: 0824-74-1725 (研究室直通)

e-mail: eigaku@tom.edisc.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.65 January 25, 2011